

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：33908

研究種目：挑戦的研究（開拓）

研究期間：2019～2022

課題番号：19H05488・20K20419

研究課題名（和文）子ども食堂が切り開く新たなソシアビリテの可能性

研究課題名（英文）New Possibilities for Sociability and Solidarity Opened Up by the Children's Cafeteria

研究代表者

成元哲（Sung, Woncheol）

中京大学・現代社会学部・教授

研究者番号：20319221

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,900,000円

研究成果の概要（和文）：子ども食堂は2012年に誕生してから10年ほどで全国に7000か所以上まで広がった。子ども食堂が普及したのはなぜか。また子ども食堂の強みはどこにあるのか。名古屋市内の子ども食堂への参与観察と全国1万人対象の「子ども食堂意識調査」から次の2点を明らかにした。子ども食堂は月に1回程度の開催が約半数を占めるが、その子ども食堂が貧困対策として機能したからではなく、普段つながることのなかった人や組織や機関が子ども食堂によってつながったという予想外の収穫によるものである。そして、子ども食堂の強みは間口の広さやゆるさであり、それが既存の企業や行政のセーフティネットからこぼれる社会層を救い上げたことにある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社会全体のケアレス化（ケアを顧みない社会）が進む中で、地縁、血縁、社縁のいずれにも還元できない新しい人間関係や社会的つながりの形成における子ども食堂の重要性を示したことは学術的にも社会的にも大きな意義がある。

研究成果の概要（英文）：Children's cafeterias were created in 2012 and have spread to more than 7,000 locations nationwide in the past 10 years or so. Why have children's cafeterias become so popular? And what are the strengths of children's cafeterias? Based on our observation of children's cafeterias in Nagoya City and a nationwide survey of 10,000 people on their awareness of children's cafeterias, we have identified the following two points. About half of the children's cafeterias are held about once a month, but this is not because the children's cafeterias function as a poverty alleviation measure, but because the children's cafeterias have unexpectedly brought together people, organizations, and institutions that would not normally be connected through such activities. The strength of the children's cafeteria lies in its openness and looseness, which has helped to rescue a segment of society that has fallen through the safety nets of existing businesses and government agencies.

研究分野：社会学

キーワード：ソシアビリテ ソーシャルネットワーク ケアの倫理 相互依存 関係性 子ども食堂

## 1. 研究開始当初の背景

名古屋都市圏は経済的に豊かな地域であり、伝統的な地域コミュニティが強く、人口当たりのNPO 団体数は全国の最下位にある。こうした地域特性が子ども食堂の数やその活動の活発さ、形態とはどのような関連があるのかを東京都市圏、大阪都市圏との比較のうえ、検証する。

## 2. 研究の目的

本研究は名古屋都市圏を対象に、何が子ども食堂の急増をもたらしたのか、誰がどのようなつながりでそれを支えているのかを明らかにする。

## 3. 研究の方法

2020年10月に愛知県内の子ども食堂を対象にアンケート調査を行った。子ども食堂はコロナ禍の影響を大きく受け、開催を休止せざるを得ないところがほとんどであったため、その状況についても調査した。加えて、子ども食堂の運営者から聞き取り調査もを行い、特別講師として招聘し、学生への知識提供の場を設けた。

2021年度は、愛知県内の約20か所の子ども食堂へのオンラインインタビューと参与観察による資料収集、それに基づくデータベース化とエピソード分析を行った。

2022年度は、第1に、名古屋市内における特徴的な二つの子ども食堂(南区・港区のほんわか食堂:二カ所で実施と、北区のわいわい食堂:二カ所で実施)に定期的に参加し、定点観測的に記録をとり資料収集を行った。第2に、全国1万人を対象にウェブ調査「子ども食堂に関する意識調査」を実施した。私たちが調査票を作り、インテージリサーチに委託、2022年10月28日~31日までマイティモニターの全国16歳以上79歳までの男女個人を対象にインターネット調査を行った。第3に、名古屋市16区と名古屋市に隣接する16の市町村の合計32市区町村における30歳から79歳までの6400人を対象に「居場所と生活の質に関する調査」を行った。こちらは私たちが調査票を作り、サーベイリサーチセンターに委託、選挙人名簿から無作為抽出し、郵送配布調査を行った(調査期間:2023年1月16日から27日)。有効回答数は1,648、回収率は25.8%であった。

## 4. 研究成果

以下では、「子ども食堂に関する意識調査」と「居場所と生活の質に関する調査」、この二つの調査の知見を手短かに記述する。

まず、「子ども食堂に関する意識調査」の主な知見は下記である。

(1)子ども食堂の「認知」についてロジスティック回帰分析を行った。概ね、女性のほうが認知しやすい、居住年数の長くなると認知しやすくなる、子どもがいると認知しやすくなる、学歴が高いと認知しやすくなる

(2)子ども食堂についての「関心」についてOLS回帰分析を行った。概ね、女性のほうが、関心が高まる、居住年数が長いほうが、関心が低い、子どもを持つほうが、効果が高い、学歴が高いほうが、関心が高い。

(3)子ども食堂への「ボランティア参加意欲」についてロジスティック回帰分析を行った。概ね、居住年数が長いほうが、参加意欲が高い、子どもがいるほうが、参加意欲が高い、技能・労務・作業のほうが、参加意欲が低い。

(4)近所付き合い・職場付き合いを説明変数とした子ども食堂の認知についてのロジスティック回帰分析を行った。概ね、近所付き合いが高いほうが、認知が高い、職場付き合いはそれほど一貫した結果を示さない、近所付き合い・職場付き合いを統制すると、子どもは有意な効果を持たない(係数も小さくなる)以上の3点が明らかになった。から、子どもの効果は近所付き合いを媒介して、認知に影響を与えていた可能性が示唆される。

(5)近所付き合い・職場付き合いを説明変数とした子ども食堂への関心についてOLS回帰分析を行った。概ね、子どもの効果(子どもがいるかないか)は、概ね有意なままで係数もそれほど小さくならない(男性のみ有意でなくなる)、近所付き合いが高い方が、関心は高い、職場付き合いは関係が深いほうが、関心が高い、以上の3点が明らかになった。

職場付き合いについては、現役世代男性と現役世代女性で違いがある。どちらも単に仕事のみを行う場合より、相談や助け合いを行ったほうが関心が高いが、男性は同僚がいなかったり無職だったりする場合に負の効果がある。これは単に仕事上の付き合いだけでも、付き合いがないよりは関心が高くなることを示す。一方、女性は仕事のみと比べて、同僚無・無職に有意な差がない。女性と男性の無職の意味合いの違いによるものだと考えられる。

(6)認知・関心・ボランティア参加意欲、この三つのいずれについても、リベラル志向はプラスの効果を持ち、家族主義志向はマイナスの効果を持つ。また、世代や男女によってその効果に大きな差がないのが特徴である。

(7)子ども食堂への公費投入の賛否を尋ねた問6の記述統計は以下の通りで、はっきり「反対」と答える人が少なく、8割近くが賛成である。

(8) 第一に、総じてケア、経済格差、社会保障へのリベラルな志向を持つ人は、子ども食堂への肯定的な態度を高める傾向にある。特に、ケアへの意識(リベラル志向、家族主義志向)や経済格差への意識(ネオリベ志向)、社会保障への意識のうちの助け合い志向は、ほとんど一貫して子ども食堂への肯定的な態度を高める。

第二に、子ども食堂へのイメージのうち「対子ども志向」は、リベラルな志向も非リベラルな志向も正の効果を持つ、やや不思議な志向である。「対子ども志向」のうち、子ども食堂の子どもへの支援の必要性をリベラルな志向は肯定し、子どもに限定された支援を非リベラルは肯定しているのかもしれない。

第三に、社会保障への意識のうち「政府志向」は、子ども食堂への意識のなかでも自身や自身の地域とのかかわりについて、あまり肯定的な態度を高めない。地域志向、地域活性志向は有意に正にならないか、なったとしても係数は小さい。むしろ否定志向を強め、主体性志向は低める傾向にある。これは子ども食堂の位置づけがいまだ曖昧なままであることと関係していると思われる。

次に、「居場所と生活の質に関する調査」の主な知見は下記である。

(1) 自宅、職場以外のサードプレイスを持つか否かはSESでは説明できない。

(2) サードプレイスを持つことによる効果は、孤独感(UCLA孤独感尺度11項目版で測定)が低下する一方、こころの健康(一般的精神健康度K6で測定:うつ病や不安障害など精神疾患をスクリーニングする質問票)とは関連がないことがわかった。

今後、SESと孤独感との交互作用、さらには、これらとこころの健康との交互作用をより詳しく統計的に検討する予定である。例えば、学歴が低い場合、サードプレイスを持っていると、孤独感がより低下するが、学歴が高い場合は、あまり関連がないといった検討である。また、雇用形態が非正規/正規で違いがあるのかどうかを検討する予定である。

(3) テーマ型活動に参加した経験があるとサードプレイスを持ちやすい(トートロジーを防ぐためにサードプレイスから「趣味の集まり・サークルを除いても同じ傾向」。一方、地縁型活動参加は、サードプレイスの有無と有意な関連は見られない。

(4) 職業あり(職業を持っていれば正規非正規など関係なく職業ありとなる)とサードプレイスの関係

職場が居場所となっていない	サードプレイスもない	14.5%
職場が居場所	サードプレイスなし	20.0%
職場が居場所となっていない	サードプレイスあり	26.6%
職場が居場所	サードプレイスあり	38.9%

性別での違いはなし。つまり女性ほど、サードプレイスあるというわけではない

(5) UCLA孤独感尺度に関しては、職場、サードプレイスともに重要で、さらに両方を居場所とすると孤独感は低くなる。ただし、この場合、職場が居場所である効果とサードプレイスがあることの効果がきいているのか、単に居場所を多く持つことが孤独感を減少させているのかについては、今後の詳細な解析が必要である。

一方、K6に対して重要なのは、職場を居場所とするか否かであり、サードプレイスを持っているかどうかはあまり関係がないようである。

以上、現時点での研究成果であるが、これらの知見を広く共有するために、単純集計の速報値を「われらのこどもプロジェクト(<https://warera-kodomo.jimdofree.com/>)と「名古屋都市圏研究会(<https://nagoya-cityresearch.jimdofree.com/>)のホームページに掲載した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 成元哲 牛島佳代	4. 巻 14-1
2. 論文標題 なぜ居住地域の社会環境が重要か -孤独の集積と住民のウェルビーイング	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中京大学現代社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 69~92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 成元哲 牛島佳代	4. 巻 14-2
2. 論文標題 食卓をめぐるソシアビリテの誕生と変容	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中京大学現代社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 113-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 成元哲	4. 巻 48-10
2. 論文標題 コロナ禍の子ども食堂 食卓をめぐるソシアビリテの変容	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想 8月号	6. 最初と最後の頁 49-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 成元哲	4. 巻 70-8
2. 論文標題 コロナ禍の子ども食堂 食卓をめぐるソシアビリテの誕生と変容	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 農村と都市をむすぶ	6. 最初と最後の頁 30-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木田勇輔, 成元哲, 河村則行	4. 巻 13(2)
2. 論文標題 何が都市のつながり格差を生み出すのか:名古屋市における地域間格差の規定要因ー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中京大学現代社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 成元哲	4. 巻 48(10)
2. 論文標題 コロナ禍の子ども食堂:食卓をめぐるソシアビリテの変容	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 49-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 成元哲, 牛島佳代	4. 巻 14(2)
2. 論文標題 食卓をめぐるソシアビリテの誕生と変容	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中京大学現代社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 113 - 126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 成元哲	4. 巻 825
2. 論文標題 コロナ時代の子どもの食堂:食卓をめぐるソシアビリテの誕生と変容	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 農村と都市をむすぶ	6. 最初と最後の頁 30-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

われらこどもプロジェクト <a href="https://warera-kodomo.jimdofree.com/">https://warera-kodomo.jimdofree.com/</a> 名古屋都市圏研究会 <a href="https://nagoya-city-research.jimdofree.com/">https://nagoya-city-research.jimdofree.com/</a> われらのこどもプロジェクト <a href="https://warera-kodomo.jimdofree.com/">https://warera-kodomo.jimdofree.com/</a> 名古屋都市圏研究会 <a href="https://nagoya-city-research.jimdofree.com/">https://nagoya-city-research.jimdofree.com/</a> 名古屋都市圏研究会 <a href="https://nagoya-city-research.jimdofree.com/">https://nagoya-city-research.jimdofree.com/</a> われらのこどもプロジェクト <a href="https://warera-kodomo.jimdofree.com/">https://warera-kodomo.jimdofree.com/</a>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	牛島 佳代  (USHIJIMA KAYO)  (10336191)	愛知県立大学・看護学部・准教授   (23901)	
研究分担者	川野 英二  (KAWANO EIJI)  (20335334)	大阪市立大学・大学院文学研究科・教授   (24402)	
研究分担者	清水 洋行  (SHIMIZU HIROYUKI)  (50282786)	千葉大学・大学院人文科学研究院・教授   (12501)	
研究分担者	木田 勇輔  (KIDA YUSUKE)  (70760734)	椋山女学園大学・文化情報学部・准教授   (33906)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------